

Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

〈人生観に沿った物語を支える〉病院

⑱ 埼玉精神神経センター (埼玉県さいたま市)



暗くなり始めた時間帯の病院。大きなガラス窓越しの照明が美しい

〈個人〉の人生観に沿った物語を支える。そんな気の利いたフレーズが埼玉精神神経センターの理念にある。前向きに人生の物語を書き換えることをここでは「Narrative based Medicine」と呼ぶ。その手助けをするのが病院とスタッフだ。丸木雄一センター長はこの考え方を筋萎縮性側索硬化症(ALS)の患者の生き方に学んだ。センターは埼玉県でこの病気の患者が最も多い病院だ。

1953年からさいたま市(旧与野市)で精神科医療を行ってきた。当時の主流は「精神科病棟は隔離するためにある」という考え方。時代とともに精

神科医療も「治療して退院し、社会復帰する」ものへと変化を遂げてきた。

開院当初から使ってきた建物が老朽化し、20年前にまず精神科急性期病棟を開設。先代理事長のコンセプトは「脳の病気はいろいろな診療科で診なくてはならない」。かつての精神科は脳外科や神経内科も含む「精神神経科」だった。新病棟には神経内科とリハビリテーション室を加えた。

時が流れ、2005年、本館が完成。神経内科で扱う神経難病にしろ、精神疾患にしろ、難しい病気だ。だが、患者が後ろ向きになったり、落ち込



1階内科系外来。ホテルのロビーを思わせる



2階精神科外来。吹き抜けが開放感を演出



6階作業療法室。ウッドデッキからはスカイツリーが見える



7階展望レストラン。窓外にはさいたま新都心を一望できる



隣接する特別養護老人ホーム「ナーシングヴィラ与野」入り口。正面の陶板画は児玉希望の作品「鶴」。2～3階には白滝幾之助の作品も



ナーシングヴィラ与野のトレーニング室。内装の色合いはフロアごとに違う

んだりすることがあってはならない。本館のコンセプトは「明るい光と癒し」になった。丸木氏に患者や家族の反応を振り返ってもらった。

「治らない病気はあります。それでも入院してみよう。直接の身内はどうしても後ろめたい思いを持ちがちです。でも、きれいな空間で診てもらったことが家族にとってせめてもの癒しになる。本館の建設前には予想もしなかったことでした」

病棟の窓の高さは90センチ。消防法などの法令で規定されている。一方、ベッドの高さは60～70センチ。これでは外が見えない。難病患者にとっては窓か

ら見える風景は世界との接点でもある。法令の壁を超えて本館の窓の高さは30センチにした。

丸木氏はあるとき、室内でサングラスをしている患者を往診で目にした。上からの照明はまぶし過ぎる。病室では間接照明を取り入れた。

センターではALSの患者でも入浴をする。浴室の設計は現場を担当する看護師に任せた。相当ユニークなものが上がってきたが、丸木氏は設計業者を説得して何とか実現にこぎ着けた。

冒頭に掲げた理念とほぼ同時に本館は竣工。理念と建物は今日も患者の人生に寄り添っている。

緑の多摩丘陵の一端で光こぼれる病室

②鶴川記念病院 (東京都町田市)



CTスキャン室。壁紙は病院のトレードマークであるひまわりの写真

今年7月に「鶴川記念病院」として新たにスタートを切ったばかり。それまでは鶴川厚生病院を名乗っていた。旧病院は1975年、多摩丘陵の一端に当たる東京都町田市三輪町に開設。東京の端っこ、横浜・川崎市に程近い緑濃い一帯だ。

組織目標は「地域社会に密着し、頼りがいのある病院を目指す」。文字どおり、地域の人々に「自分の病院」として愛されている。入院ができない人から「何でできないんだ」と怒られることもある。笑い話のようだが、事実である。

新病院オープンとともに就任した船津到院長は

病院の姿をこんなふうで紹介してくれた。

「普通の人が生活する場所。かしまった気持ちを表すよりも、良き隣人として存在する。そんな職員が多い。日本の伝統的な優しさに支えられている。気さくな人が集う場でありたい」

船津氏の控えめな主張はよく口にする「己の欲せざるところ人に施すなかれ」という孔子の言葉にも表れている。目の前の患者にそんな気持ちで接したい。大きなものより現実を大事にする。

最先端の医療を突き詰めることが役割ではない。少子化・核家族化が進む中、高齢者を家で見る



病室。採光が良くなり、患者や家族にも好評



廊下。車いすでもゆったり移動できる



食堂。厨房はオール電化



屋上。小鳥やホタルがやってくることも



食堂兼談話室。車いすが入るようにテーブルは小さめ



病院外観。裏手の斜面には桜の苗を植えたばかり

ことは難しい。維持やリハビリテーションを通じてそうした人たちに寄り添うのが役割だ。

「最後の時間を大切に過ごしていただきたい。これ見よがしのサービスよりも、後で『普通に過ごせたな』と思ってもらえれば」(船津院長)

理念として次の3つを掲げている。
〈全ての人に平等で信頼される医療を提供する／医療を通し地域住民の安心を考える／職員一丸となって地域医療の発展に尽くす〉

聖マリアンナ医科大学の教育関連病院として、高齢者医療・リハビリテーション・在宅医療を中

心に地域密着型の医療サービス提供も行っている。聖マリアンナ医大からの紹介も多い。地域の医療機関からの信頼も厚い病院といえる。

地域の患者のアクセスは課題の一つである。「牛車で通ってこれるようにできないか。安全で少し変わった乗り物なら、病院に行くのも楽しんでもらえるようになるかもしれない」(同前)

113床から180床に増えた新病院。新しい病室はゆったりサイズだ。何より光がこぼれ、明るい。「場所が変わることで提供する医療をよく見てもらえるようになりました」(同前)